

第 16 回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議

募金趣意書

第 16 回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議

「NT15」

カーボンナノチューブ (CNT) とその関連ナノカーボン物質・材料は、今や電気・電子デバイス、複合材料、環境・エネルギー材料やバイオメディカルの分野で応用・実用化が急速に進み、21 世紀の人類社会にとって、かけがえのない物質・材料となっています。すでに数年前から、ITO に代わる CNT の透明導電性フィルムを用いたタッチパネルの実用化がスマートフォンなど様々な分野で行われ、将来のフレキシブル・ディスプレイ用のタッチパネルとして、多くの期待が CNT にかかっています。

我が国では、CNT が日本人によって発見されたこともあり、CNT とその関連のナノ物質・材料の研究開発は長い歴史を有し、世界最先端のトップレベルを走り、常に世界をリードしてきました。CNT の発見から 20 余年が経過しましたが、CNT の研究開発は依然として進歩が急速であり、そのため、基礎、応用と実用化を問わず、国際的なフォーラムの場での最新研究の進捗状況の発表、意見交換や議論が必須となっています。

現在まで、CNT に関しては非常に多くの国際会議やシンポジウムが毎年世界各国で開催されてきましたが、本「ナノチューブ科学と応用に関する国際会議 (International Conference on the Science and Application of Nanotubes)」(通常、NT 会議と略します)は、中でも最も権威と伝統のある CNT に関する会議です。その開催規模も 500 名前後の参加者がある大規模な会議となっています。1999 年に米国ミシガン州イースト・ランシングで第 1 回の NT 会議が開催されて以来、NT 会議は毎年、アメリカ・ヨーロッパ・アジアを中心に開催され、次回の名古屋での開催は、第 16 回 (NT2015、略して NT15) を数えます。

CNT の国際会議として最も大規模かつ権威ある NT 会議を日本で開催することは、我が国の CNT 研究開発のさらなる発展への寄与はもとより、世界における CNT 研究開発の最新情報を交換・共有する極めて重要なフォーラムの提供となります。一方、この国際会議は第 1 回から若手研究者や大学院生の積極的な参加・討論を奨励しており、次世代の CNT および関連物質の研究開発を担う若手研究者に、世界最先端の研究を行っている世界のトップ研究者と直接交流できる又とない機会を提供することになります。これらは、我が国における将来のナノカーボン研究開発の大きな発展に繋がると、強く信じております。

第 16 回 NT 会議の日本開催にあたり、その運営はできるだけ簡素・質素を旨とし、諸経費は参加者からの会費で充当をと考えました。しかしながら、より多数の優秀な研究者にご参加いただき、本会議の内容を充実させその成果を大なるものとするためには、参加費だけで必要経費の全てを賄うのは難しい、各方面各位様からのご支援ご協力を仰がざるを得ない、というのが実情です。つきましては、上記の趣旨をご理解頂き、御浄財をお寄せ頂ければ幸甚に存じます。何卒よろしくお力添えを賜われますよう重ねてお願い申し上げます。

第 16 回 ナノチューブ科学と応用に関する国際会議組織委員会

組織共同委員長	篠原 久典	(名古屋大学)
組織共同委員長	飯島 澄男	(名城大学、名古屋大学、産業技術総合研究所)
組織共同委員長	遠藤 守信	(信州大学)
組織委員	吾郷 浩樹	(九州大学)
組織委員	安藤 義則	(名城大学)
組織委員	榎 敏明	(東京工業大学)
組織委員	大野 雄高	(名古屋大学)
組織委員	大町 遼	(名古屋大学)
組織委員	北浦 良	(名古屋大学)
組織委員	坂東 俊治	(名城大学)
組織委員	畠 賢治	(産業技術総合研究所)
組織委員	林 卓哉	(信州大学)
組織委員	本間 芳和	(東京理科大学)
組織委員	片浦 弘道	(産業技術総合研究所)
組織委員	加藤 俊顕	(東北大学)
組織委員	丸山 茂夫	(東京大学)
組織委員	松田 一成	(京都大学)
組織委員	宮本 良之	(産業技術総合研究所)
組織委員	中嶋 直敏	(九州大学)
組織委員	野田 優	(早稲田大学)
組織委員	岡田 晋	(筑波大学)
組織委員	岡崎 俊也	(産業技術総合研究所)
組織委員	齋藤理一郎	(東北大学)
組織委員	斎藤 晋	(東京工業大学)
組織委員	斎藤 毅	(産業技術総合研究所)
組織委員	齋藤 弥八	(名古屋大学)
組織委員	末永 和知	(産業技術総合研究所)
組織委員	竹延 大志	(早稲田大学)
組織委員	友納 茂樹	(産業技術総合研究所)
組織委員	湯田坂雅子	(産業技術総合研究所)
組織委員	ステファン・イレ	(名古屋大学)

会議の概要

1. 会議の名称とテーマ

1) 会議の名称

和文名：第16回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議

英文名：The Sixteenth International Conference on the Science and Application of Nanotubes

(略称：NT15)

2) 会議のテーマ

「カーボンナノチューブとグラフェンなど関連物質の科学と応用・実用化」

2. 主催・併催機関などの名称

1) 主催

第16回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議組織委員会

2) 共催

フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会

文部科学省 科学研究費補助金 新学術領域研究「原子層科学」

3. 開催期間

2015年6月28日(日)～7月3日(金)

4. 開催場所

主会場 名古屋大学豊田講堂 副会場 名古屋大学東山キャンパス内建物

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 052-781-5111

5. 主催責任者

第16回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議

組織委員会 共同委員長 篠原 久典、飯島 澄男、遠藤 守信

事務局担当者：株式会社 インターグループ

〒450-0002 名古屋市中村区名駅2-38-2 オーキッドビル8階

TEL：052-581-3241 / FAX：052-581-5585 / Mail：nt15@intergroup.co.jp

6. 日本開催の経緯

日本での開催は2006年6月の第7回(長野市)以来の2度目です。2013年6月にヘルシンキ(フィンランド)で開催された第14回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議期間中に開催された理事会において、第16回会議の立候補地の公募が決まりました。それを受けて、名古屋とシンガポールが立候補し、2013年9月行われた理事会で正式に第16回会議を日本(名古屋)で開催することが決定されました。日本では、準備段階からフラレン・ナノチューブ・グラフェン(FNG)学会を中心に日本開催の誘致活動を活発に進めてきて、それが誘致成功に結実しました。本会議はFNG学会と文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「原子層科学」の全面的支援と共催を得ています。

なお、この会議の開催状況は、以下のとおりです。

開催年	開催地	参加国数	参加者数	日本人参加者数
2006年(第7回)	日本(長野)	27カ国	600	50
2009年(第10回)	中国(北京)	23カ国	800	30
2010年(第11回)	カナダ(モントリオール)	23カ国	500	30
2011年(第12回)	イギリス(ケブリッジ)	21カ国	600	30
2012年(第13回)	オーストラリア(ブリスベン)	22カ国	550	40
2013年(第14回)	フィンランド(ヘルシンキ)	22カ国	600	30
2014年(第15回)	アメリカ(ワシントン)	22カ国	600	40

7. 日本開催の目的と意義

カーボンナノチューブは、日本人が日本で発見した世界に誇るナノカーボン物質・材料であり、この分野の研究開発は日本が伝統的に世界で最も質・量ともに極めて高いのが特徴です。また、日本には世界でも類例を見ないフラレン・ナノチューブ・グラフェン(FNG)学会というナノカーボンに特化した学会があり、過去四半世紀、関連分野を牽引してきました。学会員はおよそ800名で、本国際会議(NT15)の組織委員の多くはFNG学会の会員です。このような状況を背景に、カーボンナノチューブとナノカーボンの分野において世界で最も伝統と権威のある本会議を日本で開

催することは、産学官の研究者にとって、また広義には日本の発展にとって大変に意義深いことです。

本国際会議は、我が国の CNT 研究開発のさらなる発展はもとより、世界における CNT 研究開発の最新情報を交換・共有する極めて重要なフォーラムです。また、この国際会議は第 1 回から若手研究者や大学院生の積極的な参加・討論を奨励しています。次世代の CNT および関連物質の研究開発を担うこれらの若手研究者が、世界最先端の研究を行っている世界のトップ研究者と直接交流できる又とない機会を提供することになります。ひいては、我が国における将来のナノカーボン研究開発の大きな発展へと繋がると強く信じております。

8. 開催計画の概要

1) 会議日程

6月28日(日)	サテライトシンポジウム
6月29日(月)	開会式 本会議(口頭発表・ポスターセッション) ウェルカムパーティー
6月30日(火)	本会議(口頭発表, ポスターセッション)
7月1日(水)	本会議(口頭発表, ポスターセッション) エクスカージョン、バンケット
7月2日(木)	本会議(口頭発表, ポスターセッション)
7月3日(金)	本会議(口頭発表, ポスターセッション) 閉会式(午前のみで終了)

2) 主要トピックス

カーボンナノチューブ、グラフェン及び関連 2 次元原子層物質などの基礎、応用と実用化に関するテーマ。

3) 参加予定者

国内	300 名
海外	300 名
合計	600 名

4) 参加予定国 24ヶ国・地域

アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、中国、韓国、台湾、香港、シンガポール、タイ、イギリス、ドイツ、フランス、スペイン、スイス、デンマーク、オランダ、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、ベルギー、イタリア、オーストリア、オーストラリア、インド

5) 会議使用言語

英語

9. 寄附金を必要とする理由

準備運営等に関する総経費は38,475,000円が見込まれています。これらの諸経費は、本来参加登録費等で賄うことが建て前ではありますが、登録料を低額に抑えたいとの事由により総額38,475,000円から、参加費等自己負担額28,475,000円、補助金等5,000,000円を除く不足額、5,000,000円を諸企業及び諸団体様からのご援助に頼らざるを得ないのが現状です。従いまして、下記の費用を会議に協賛頂ける関係企業様等からの御寄附金にて充当したいと存じます。

10. 収支予算(案)

単位：千円

支区分	金額
収入)	
1. 自己負担金(参加登録費等)	28,475
2. 補助金/助成金等	5,000
3. 寄附金等	5,000
収入合計	38,475
(支出)	
1. 会議準備費	8,647
2. 会議運営費	27,827
3. 展示会等	510
4. 募金経費	256
5. 事後処理費	1,235
支出合計	38,475

11. 寄附金募集要項

(1) 募金の名称

第16回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議寄附金

(2) 募金の目標額

5,000,000 円 (総額 38,475,000 円の内)

(3) 募金期間

2014年(平成26年)7月1日 ~ 2015年(平成27年)6月27日(土)
(会議開催日前日まで)

(4) 寄附金の使途

第16回ナノチューブ科学と応用に関する国際会議の準備並びに運営に関する費用に
充当します。